

研究課題：歯科専門職介入の必要性を判断するための多職種向けスクリーニング用紙の  
開発

研究者名：柴田 佐都子<sup>1)</sup>、ステガロユ・ロクサーナ<sup>1)</sup>、伊藤 加代子<sup>2)</sup>、大内 章嗣<sup>1)</sup>

所 属：<sup>1)</sup>新潟大学医歯学総合研究科 口腔生命福祉学講座、

<sup>2)</sup>新潟大学医歯学総合病院 口腔リハビリテーション科

本研究は、先行研究と OHAT を基に作成したスクリーニング用紙を用いて、介護施設の看護師・介護職員が口腔および摂食・嚥下機能のスクリーニングを行った場合の結果と先行研究の歯科衛生士のスクリーニング結果から、多職種が口腔および摂食・嚥下機能のスクリーニングを行う際の用紙のスクリーニング機能を検討した。

介護老人福祉施設の入所者（66 名）に対して観察者は、評価基準の歯科医師 1 名、看護師 4 名および介護職員 8 名とした。各入所者に対し、3 職種それぞれが口腔のスクリーニングを実施した。スクリーニング用紙は、口腔状態として Chalmers らの OHAT から「口唇」「舌」「歯肉・口腔粘膜」「唾液」「天然歯の状態」「義歯の状態」「口腔衛生状態」を採用し、摂食・嚥下機能として発表者らが以前報告した用紙から「下口唇を越えて舌の突出」「頬の膨らまし」「構音」「経口摂取」「食事の時にむせる」を加え 12 項目とし、各項目の評価段階は「良好」「やや不良」「不良」の 3 段階とした。スクリーニング結果は、歯科医師を評価基準とした看護師・介護職員毎の各項目の評価を、所見の有無によって 2 段階に分類した完全一致率および一致度（κ）を算出した。また、先行研究で実施したスクリーニング用紙から、同分類のスクリーニング項目を選択し、歯科医師を基準とした先行研究の歯科衛生士、本研究の看護師・介護職員のスクリーニング項目の一致を比較検討した。さらに、看護師・介護職員のスクリーニング結果から各項目における 2 段階の相違率を算出し、3 職種のスクリーニング結果の一致と併せて用紙のスクリーニング機能を分析した。

κ は看護師・介護職員とも、「天然歯の状態」「義歯の状態」および摂食・嚥下機能に関する 5 項目において中等度以上の値を示した。一方、「口唇」「舌」「歯肉・口腔粘膜」「唾液」「口腔衛生状態」では、看護師・介護職員ともに低い一致を示し、段階的相違率でも相違率は高く、両職種において過小評価の傾向が認められた。さらに、先行研究の歯科衛生士および本研究の看護師・介護職員のスクリーニングにおいて、低い一致率がみられた項目は歯肉・口腔粘膜に関する項目、および舌関連の項目であった。歯肉・口腔粘膜に関する項目では歯科衛生士の高い一致率に比較して看護師・介護職員では低い一致率を示した。また、舌関連の項目は、先行研究のスクリーニング用紙の改善を試みたが、看護師・介護職員でも低い一致率が示した。これらの項目の評価は歯科専門性が高く、他職種がスクリーニングを行う際は、文章表現を補完する視覚的媒体等の必要性が示唆された。

したがって、看護師と介護職員は本用紙の多くの項目において的確にスクリーニングができると考えられるが、低い値を示した 5 項目についてはスクリーニング機能を向上させるために用紙の改善が必要であると考えた。